

会津地域におけるグループホームの調査・提案

A2200820 須藤 唯

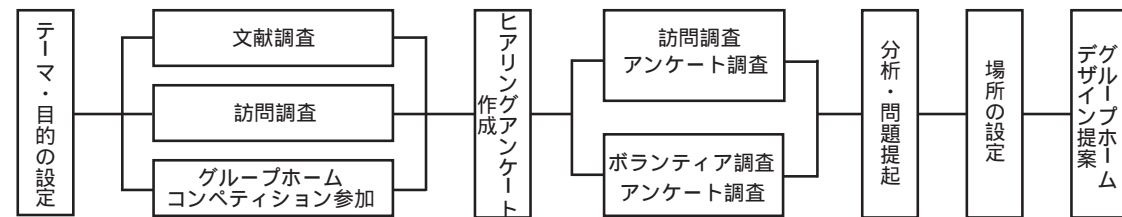
研究概要

現在、日本のグループホームはどのような状況なのか調査研究を行う。全国のグループホームの室内空間を調査し、中でも特に会津地域のグループホームの現状調査を行う。会津という特定の地域におけるグループホームがどのように作られているのか、立地場所によってどういった違いがあるのか詳しく調査を行う。建物としての問題点を抽出するだけでなく、グループホームの介護スタッフや入居者、抱えている問題点などについても調査する。その解決案を考え、現在喜多方市東桜ヶ丘のグループホームの建てられている敷地条件で、その場所ではどのようなグループホームが利用者にとってよい生活空間になるのかを研究し提案をする。

背景・目的

社会問題の1つに高齢者介護という大きな課題がある。高齢化社会である現代において、この問題はこれからますます顕著になっていく。身近にも介護問題があり、高齢者福祉施設、特に認知症の高齢者の共同住宅であるグループホームに関心を持った。グループホームは施設ではなく、共同生活を行うための住居と考えられている。そのグループホームが特定の地域において、地域とのつながりを持ちながら、入居者や介護スタッフがよい生活を送れる居住環境を提案する。

研究方法



調査結果

ボランティア・グループホーム訪問調査
 夏季休業中、2か所のグループホームにボランティアスタッフとして3日間ずつ、計6日間働かせていただいた。訪問調査には4箇所のグループホームに赴き、調査を行った。

グループホーム名	場所	訪問日	調査形式
東山しょうぶ苑	会津若松市	平成21年 6月10日	訪問調査
あじさい	湯川村	平成21年 8月17日-8月19日	ボランティア調査
やわらぎ	喜多方市	平成21年 8月27日-8月29日	ボランティア調査
夢の森	熱塩加納町	平成21年 9月19日	訪問調査
ひびき	山都町	平成21年 9月19日	訪問調査
至福の郷	喜多方市	平成21年 9月19日	訪問調査

表1 調査リスト



グループホーム至福の郷 グループホーム夢の森



グループホームあじさい

ボランティア調査では、建築年数や地域性の異なるグループホームで働き、それぞれグループホームの設計からくる特有の問題点や、介護をする上での共通した問題点などがあることが明確に分かった。また入居者用にヒアリングのアンケートを作成したが、詳しくヒアリングをすることが困難であることが分かり、介護スタッフから入居者の特徴などについてを聞き、調査をした。

グループホームの入居者は認知症高齢者であるため、室内をバリアフリーにするという以外にも入居者が自分の部屋を認識するための工夫も必要であることが分かった。他にも共有スペースと個人スペースの境がダイレクトすぎることや、スタッフが介護や家事作業する上でのスペースの広さ問題など、アンケート調査や訪問調査を行って問題点が現れた。建築年数が経っているグループホームでは、建築当初の入居者に合わせてつくられていたため、現在の入居者には少し生活しにくい環境になっていた。なぜなら、今から10年程前の入居者は足腰もしっかりしていたので、少しの段差ならば上り下りもできていたため、建築年数の経っている所ではとところどころに段差が見受けられるからである。しかし、現在の入居者は残存機能の低下が見うけられ、少しの段差でも危険を伴うことが分かった。

入居者については、それぞれ認知症の段階、要介護度の段階があることがわかり、認知症が軽度の入居者が他の入居者の世話をしていたりすることが分かった。

アンケート調査

アンケート調査は訪問を行ったグループホーム3箇所とボランティア調査を行った2箇所で行い、介護スタッフは4箇所、入居者は解答できなかった人などについてスタッフに聞き、調査を5箇所で行った。

入居者は9割近くが女性であり、80歳代が半数以上を占めていることが分かった。介護スタッフの年齢は50歳代が半数以上を占めており、自宅での介護経験などからグループホームで働こうと思ったスタッフが多くいることが分かった。

水周りに関しての要望が多く、トイレの高さや汚物洗い場、脱衣所などのスペースに要望が多かった。入居者が生活しやすいよう、スタッフが介助しやすい環境にすることも大事であることが考えられる。

グループホームの良いところで少人数体勢の居住環境、家庭と同じようなリズムで生活することが出来る環境というのがあげられた。この2つは養護老人ホームや老人デイサービスセンターなどとの違いでも上げられており、グループホームの特徴であり良い点であるという回答が多かった。逆に不便なところでは、夜勤のスタッフが1名だけで、入居者の様態が急変してしまった場合などに大変であるということが多くあげられた。しかしそれ以外では、建物に関してのことであり、グループホームの体制に対して不便と思うところはあまり見受けられなかった。

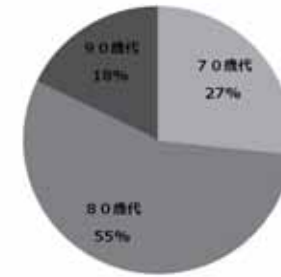


表2 入居者の年齢割合

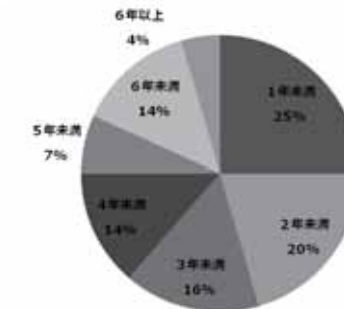


表3 入居者の入居年数割合

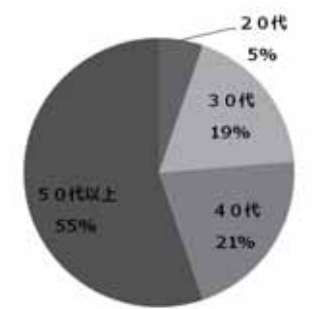


表4 スタッフの年齢割合

問題提起

- 調査を行った上で、グループホームの問題についてあげていく。
- ・どのグループホームも入居者が自分の部屋を認識するのが困難である。
 - ・グループホームに入居する入居者の残存機能が年々低下している事がわかり、これから入居する高齢者の状態も考え、グループホームの設計を行うことが必要である。
 - ・トイレ、テーブル、椅子、洗面台などの入居者がよく使用する物の高さなども考えなければならない。
 - ・植栽スペースは室内にいながら四季の変化を感じ取れるので、十分に活用されることが望ましい。
 - ・共有スペースと個人スペースとの境が直接的すぎる。
 - ・住宅地であるため、光を取り入れにくい。
 - ・開口部が少ないと、採光や通風が悪くなり、室内環境が暗くなりがちになる。
 - ・地域の自然環境、特に冬の室内の温度や、積雪について地域ごとに対処方法が変わってくる。
 - ・これから入居する高齢者のライフスタイルの変化に、対応できるような居住環境を考える必要がある。



扉を認識するための工夫

デザイン提案

現在、喜多方市東桜ヶ丘に建っているグループホーム「やわらぎ」の敷地を想定条件とし、その場所に建てること仮定し提案を行う。住宅地であるが入居者が室内に居ながら四季の変化を感じられるよう、大きな開口部を設け敷地内の植栽や地域の変化を眺められる設計にする。また、建物内が暗くならないよう採光についても考える。自室だと認識できるような工夫を設け、また共有部と個室との境界を少しやわらげるような空間の提案をする。



提案予定の図面



現在建てられている「やわらぎ」